二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答用紙は別紙（縦書）

【答案作成上の注意事項】

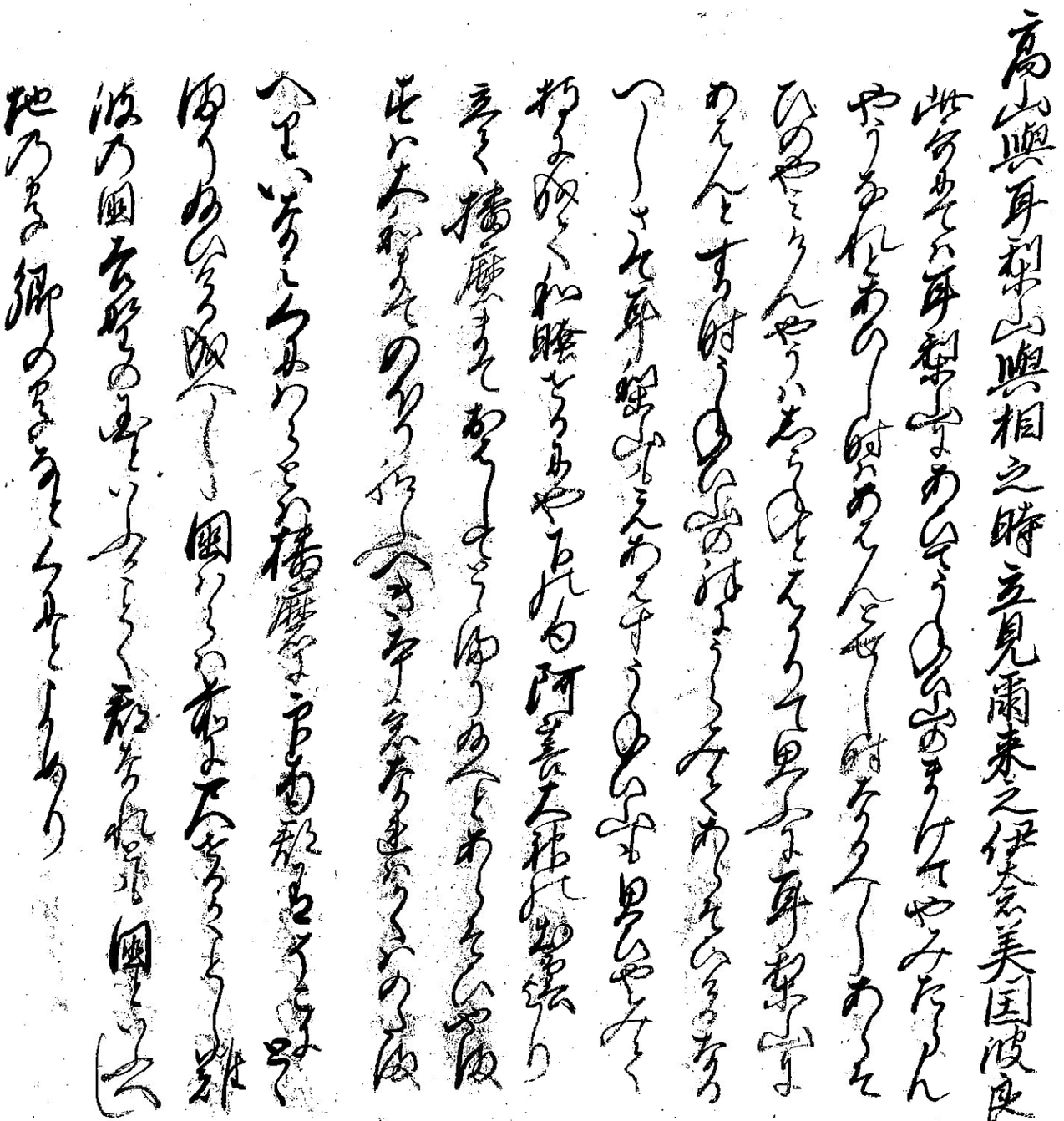
1　解答用紙の最初に記されている時代・分野のうち、自分の選択したものを○で囲むこと。
2　「近代」以外の時代・分野の答案は、縦桝目（表裏）の共通解答用紙に記すこと。
3　「近代」は、解答用紙が別になっているので、それを使用すること。

＊各時代・分野の試験問題は、左掲のナンバーの問題用紙に記されている。

上代	二
中古韻文・中世韻文	三
中古散文	四
中世散文	五
近世	六
近代	七～一〇
日本語学	一一～一三
和漢比較文学	一四

上代

問　次に掲げた資料について、問イ・ロ・ハに答えよ。



問イ　一行目は万葉集の和歌である。現在の標準的な訓を、すべて平仮名で記せ。

問ロ　資料を正確に翻字せよ。（翻字にあたっては、漢字・仮名いずれも通行の字体を用いること。）

問ハ　資料の内容について、自由に論述せよ。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中古韻文・中世韻文

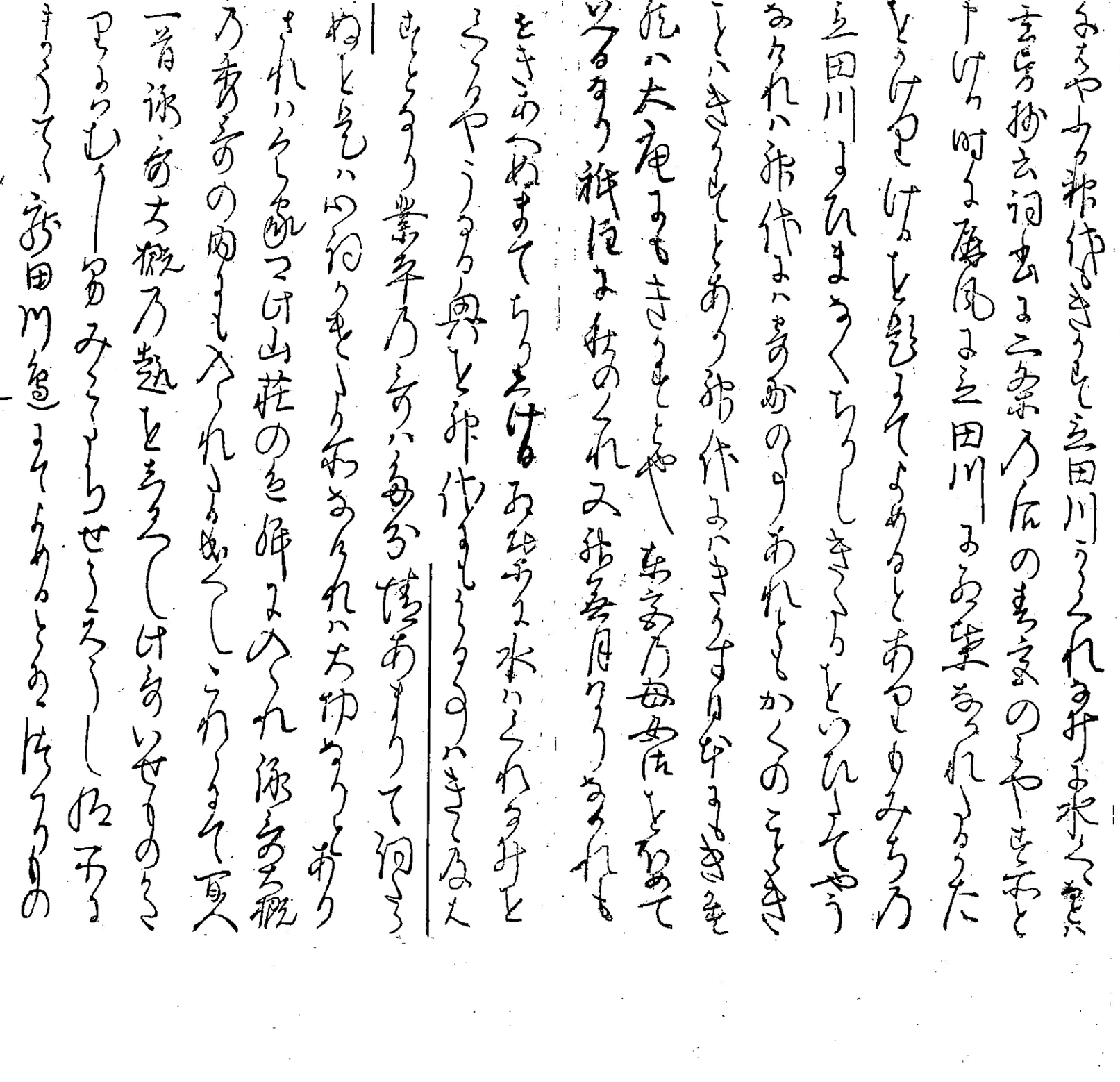
左は、加藤磐斎『三部抄増註』巻第四「秀哥躰大畧之中」の一部である。次の問いに答えよ。

（1）この資料をすべて、改行等そのままに翻字し、適宜、必要な個所に句読点、濁点を加えよ。

（2）ここに注釈されている和歌について、その修辞技巧および句切れを説明せよ。

（3）引用される「玄旨抄」「祇注」の著者のうち、いずれか一人について知るところを述べよ。

（4）当該歌人に対する傍線部の評言について説明せよ。



二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中古散文

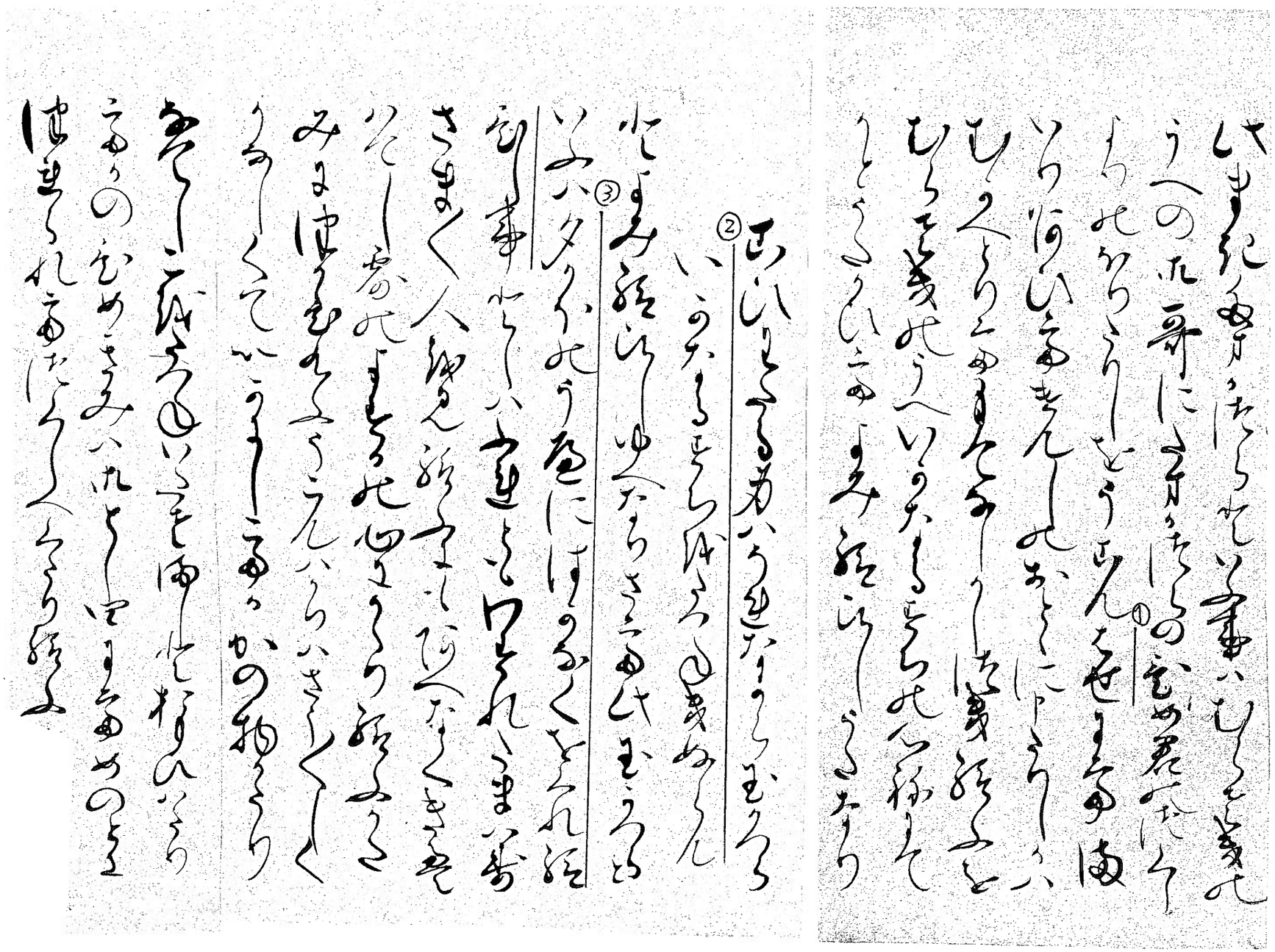
左は、『源氏物語』のある梗概書の一節である。次の問いに答えよ。

（1）　左の全文を改行等そのままに翻字し、適宜必要な箇所に句読点、濁点を加えよ。

（2）　傍線部①はいかなる場所か。説明せよ。

（3）　傍線部②の内容は、具体的にはいかなる疑問か。説明せよ。

（4）　傍線部③に示されている物語内容をより具体的に記せ。



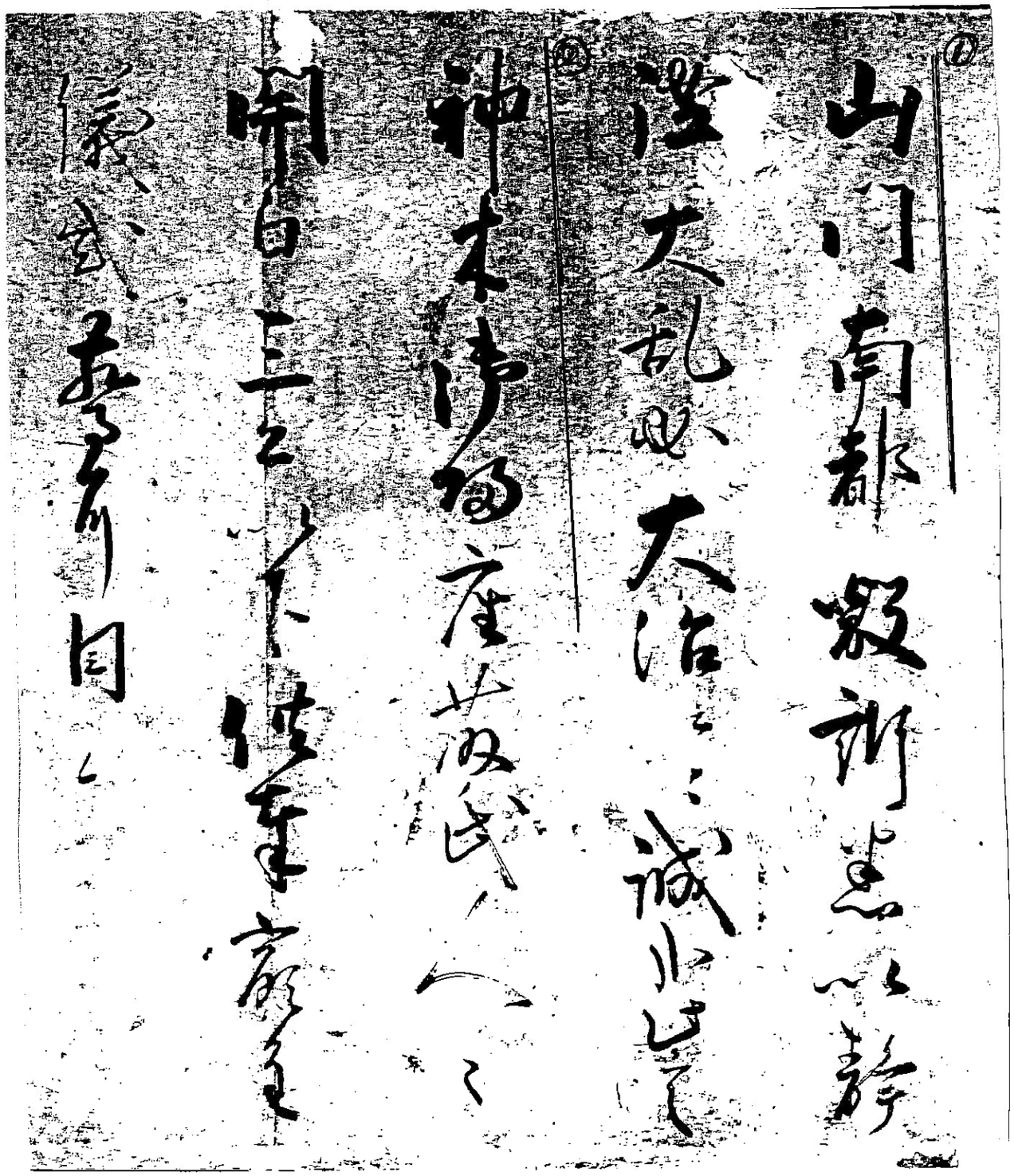
二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中世散文

問一　左の文章を字配りはそのままに、句読点・返り点・送り仮名を施して翻字しなさい。

問二　左の文中の傍線①・②は何を意味するか、答えなさい。

問三　左の文章はどのような時代を背景にしているか、答えなさい。



5/14

近世

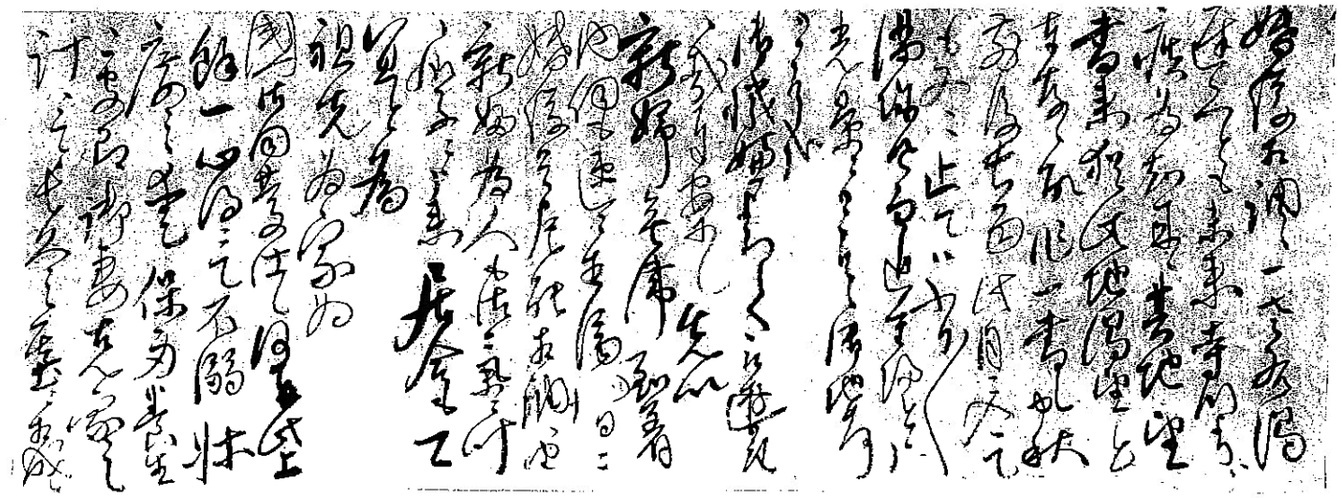
二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース

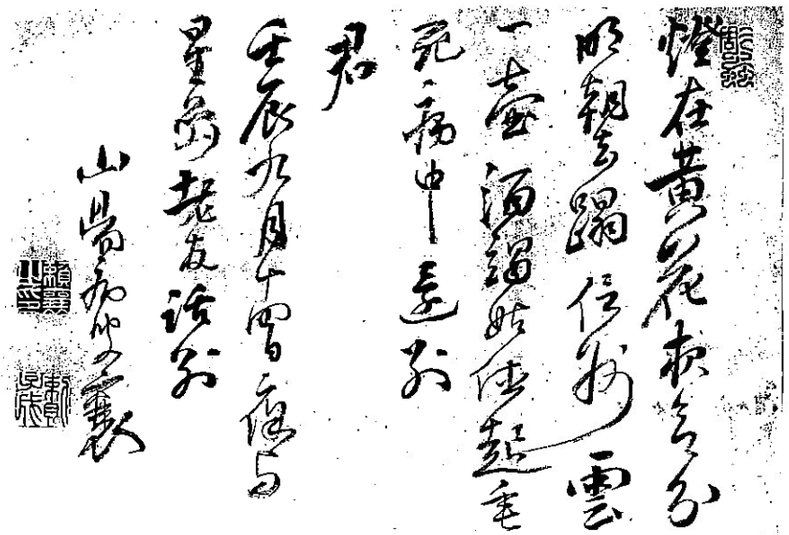
次のA・B・Cの三種の文章について、後の各問に答えよ（縦書きの解答用紙を使用し、問題番号漢数字で記した後に解答せよ。　※解答は別紙（縦・横　書）

6/14

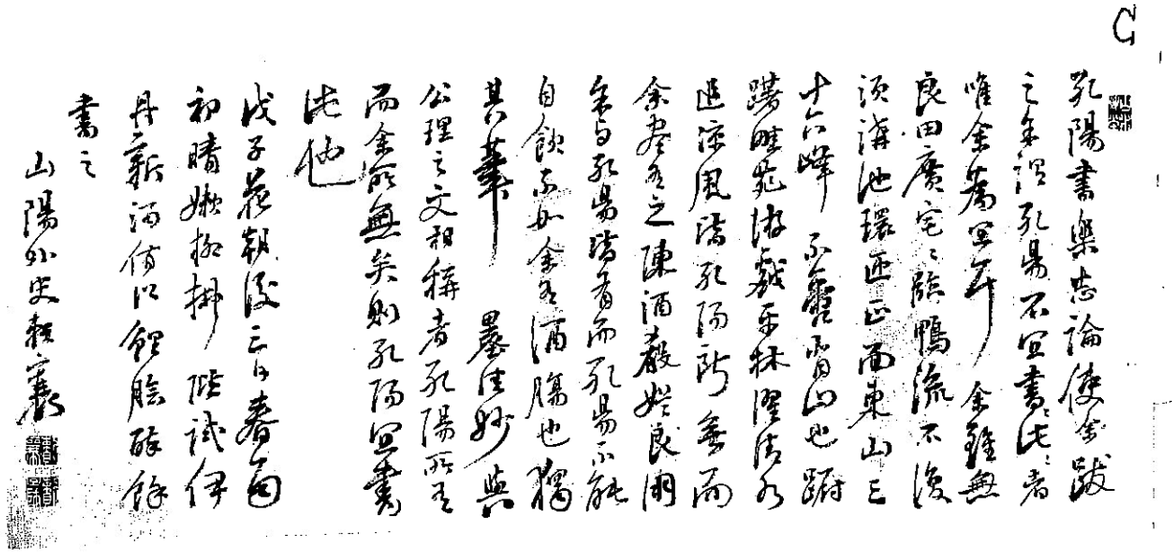
A



B



C



問一、Aの資料全文「婚儀～相成候」を句読点を適宜補って翻字せよ。

問二、Bの資料全文（印記は除く）を翻字せよ。

問三、Bの資料の冒頭二十八字を一句毎に四行に分けて書き下し文に直せ。

問四、Bの資料の韻字を全て記せ。

問五、Bの資料を各句ごとに解釈せよ。

問六、Cの資料を全文翻字せよ。

問七、Cの資料の全文を精密に現代語訳せよ。なお、孔陽とは市河米庵のことである。

以上

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　**専門科目**　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

近代　次の1～3の問いに答えよ。

1　次に掲げるのは、「たけくらべ」および樋口一葉に関する資料である。これらを用いて、同時代における「たけくらべ」の位置をどう理解するか、また一葉や「たけくらべ」を論じるにはどのような視点があるか、具体的に論述せよ。（20点）

たけくらべ

一葉

（一）

廻れは大門の見かへり柳いと長けれど、おはぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明暮れなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き、三島神社の角を曲りてより是れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ所とて、半さしたる雨戸の外に、怪しき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ことごとしく、一家内これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に欲深様のかつぎ給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、夏着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明

閨秀小説

目次

美人不忍池を望む……渡邊省亭
はしがき……中島歌子
萩桔梗……花圃女史
わすれがたみ……若松賤子
十三夜……一葉女史
黒眼鏡……薄氷女史
暮ゆく秋……大塚楠緒女
村時雨……蓉花女史
片時雨……ゆかり女

しろばら……稲舟女史
手紙の内……藤島郁子
刷毛彩色……石榑わか子
名誉夫人……小金井喜美子
やみ夜……なつ子
閨秀小説の奥に……竹屋雅子

96

第二のひいき。兎いはん角いはんと思ひ居たりしことも、その言葉こそ同じからね、先づ前席の人の無碍自在なる弁才もて演べ尽されたる心地すれば、われは口を杜いでも止むべきかなれど、さてはまた余りに残惜しかるべし。大音寺前とはそもそもいかなる処なるぞ。いふまでもなく売色を業とするものゝ余を享くるを辱とせざる人の群り住める俗の俗なる境なり。されば縦令よび声ばかりにもせよ、自然派横行すと聞ゆる今の文壇の作家の一人として、この作者がその物語の世界をこゝに択みたるも別段不思議なることなからむ。唯だ不思議なるは、この境に出没する人物のゾラ、イプセン等の写し慣れ、所謂自然派の極力摸倣する、人の形したる畜類ならで、吾人と共に笑ひ共に哭すべきまことの人間なることなり。われは作者が捕へ来りたる原材とその現じ出したる詩趣とを較べ見て、此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かする手段あるを知り得たり。われは縦令世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくることを惜まざるなり。且個人的特色ある人物を写すは、或る類型の人物を写すより難く、或る境遇の Milieu に於ける個人を写すは、ひとり立ちて特色ある個人を写すより更に難し。たけ競出でゝ復た大音寺前なしともいふべきまで、彼地の「ロカアル、コロリット」を描写して何の窘迫せる筆痕をも止めざるこの作者は、まことに獲易からざる才女なるかな。若し夫れ一章一句の上に現れたる霊機をば、前席なりし人の燃犀茜ならず幽として燭せざることなき眼光もて照し出し捉へ来りし後なれば、われ復た何をか言はむ。已むことなくば、かの第十二章より第十三章に亘れる、信如が時雨ふる日に母の使に出でゝ、大黒屋の寮の前にて、朴木歯の下駄の端緒を脱かせし一段をや、猶取り出でゝ言ふべき。唯だ是れ寸許の友禅染の截片なれど、その美登利が針箱の抽出しより取り出されてより、長吉が下駄借りて信如の立ち去りし跡に紅入のいじらしき姿を空く地上に委ねたるに至るまで、読者の注意を惹くこと、希有の珠宝にてもあるかの如くなるはいかに。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　**専門科目**　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

2　次に掲げる六つの資料について、「作者」「作品」名を答えた上で、その内容や執筆の背景、発表媒体との関わりなどを、各七行以内で述べよ。（各10点）

①

眞珠夫人 (16)

菊池寛 作　鰭崎英朋 畫

（美しき遲參者）その二

靈柩を乘せた馬車を先頭に、一門の人々を載せた馬車が、七八臺も續いた。信一郎は、群衆を掠り拔けて、馬車の止まつた方へ近づいた。次ぎ〳〵に、馬車を降りる一門の人々を、仔細に注視しようとしたのである。

靈柩の直ぐ後の馬車から、降り立つたのは、今日の葬式の喪主であるらしい青年であつた。一目見ると、横死した青年の肉親の弟である事が、直ぐ判つた。それほど、二人はよく似て居た。たゞ、學習院の制服を着て居る此青年の背丈が、國府津で見たその人の兄よりも、一二寸高いやうに思はれた。

その次ぎの馬車からは、二人の女性が現はれた。信一郎は、その孰れかゞ瑠璃子と呼ばれはしないかと、熱心に見詰めた。二人とも、

死んだ青年の、妹であることが、

の眼が意外に近づいた。然し、近い人々は、殆ど振向きもしなかつた。が、會葬者の殆ど過半が、此無遠慮な闖入者に對して、非難に近い注視を投げたのである。

自動車は、式場の入口に横附けにされた。伊太利製らしい、優雅な自動車の扉が、運轉手に依つて排せられた。

會葬者の注視を引いた事なさには、何の恐れ氣もないやうに、裾を掲げた白孔雀のやうな、け高さと上品さとで、その踏段から地上へ、スックと降り立つたのは、またうら若い一個の女性だつた。降りざまに、その面を掩うて居た黒い薄絹のヴェールを、かなぐり捨てゝ無雜作に自動車の中へ、投げ入れた。人々の注視の裡に、微笑さも羞恥さも付かぬ表情を、湛へた面は、くつきりと皎く輝いた。白襟紋付の瀟洒な衣は、そのスラリとした姿を一層氣高く見せて居た。彼女は、何の惡怯れた容子

②

~~一生中最も慘憺たる一週間~~

余は是此を記臆せん爲めに此時を誌すとも費やせし者なり

嗚呼人の精神は脆弱なる哉此に至る迄ラブの權勢に枉げらるゝ者

なり又た此に至らんとは余は明治二十年八月廿一迄は不信心者の一人なり

し後ち余は嘗つて詩筆を罵つて止まざる者なり、其德義道義を輕蔑

して足下に蹂躙せんと居たる者なり又た余は實に數多の婦人を苦しめて

自ら以て快しと爲したる者なり、余は既にラブを可きの婦人なしと信じて

全く心を此道に絶ちたりき、計らざりき僅に一ヶ月許の時日内に於て

余は此最も恐るべきラブの餓鬼道に陷らんとは、石坂美那嬢は曾つ

て知れる者なり然れども互に親密の交際を結びしは實に近年

の事にて此一月前ゆありたり、嗚呼余の活潑なる生活と嬢の繁多なる

生活とを一致せば吾人の快樂は果して如何ならんや、余は凡夫の一疾病

③

忘れえぬ人々

多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に龜屋といふ旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であつた、此日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しい此町が一段と物淋しい陰鬱な寒むさうな光景を呈して居た。昨日降つた雪が未だ殘つて居て高低定らぬ茅屋根の南の軒先からは雨滴が風に吹かれて舞うて落ちて居る。草鞋の足痕に溜つた泥水にすら寒むさうな漣が立て居る。日が暮れると間もなく大概の店は戸を閉めて了つた。闇い一筋町が寂然として了つた。旅人宿だけに龜屋の店の障子には燈火が明く射して居たが、今宵は客も餘りないと見えて内もひつそりとして、をり〳〵雁頸の太さうな煙管で火鉢の縁を敲く音がするばかりである。

突然に障子をあけて一人の男がのつそり入ッて來た。長火鉢に寄かゝッて胸算用に餘念も無かつた主人が驚て此方を向く暇もなく、廣い土間を三歩ばかりに大股に歩いて、主人の鼻先に突ッた男は年頃三十には未だ二ッ三ッ足らざるべく、洋服、脚絆、草鞋の旅裝で鳥打帽をかぶり、右の手に蝙蝠傘を攜へ、左に小さな革包を持て其を脇に抱て居た。

『一晩厄介になりたい。』

主人は客の風采を視て居て未だ何とも言はない、其時奥で手の鳴る音がした。

『六番でお手が鳴るよ。』

啅へる樣な聲で主人は叫むだ。

8/14

二〇一八年度
【博士後期課程】

早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

④

秋が來たんだ

――放浪記――

林芙美子

十月×日

一尺四方の四角な天窓を眺めて、始めて紫色に澄んだ空を見た。秋が來たんだ。コック部屋で御飯を食べながら私は遠い田舎の秋をどんなにか戀しく懐しく思つた。

秋はいゝなあ……。

今日も一人の女が來た。マシマロのやうに白つぽい一寸面白さうな女。厨になつてしまふ、なぜか人が戀ひしい。

そのくせ、どの客の顏も一つの商品に見えて、どの客の顏も疲れてゐる。なんでもいゝ私は燒芋を買む廣徳を考へてゐた。やり切れない。

なんとかしなくては、全く自分で自分を朽ちさせてしまふやうだ。

十月×日

腐い食堂の中を片づけてしまつて始めて自分の體になつたやうな氣がする。眞實に何か書きたい。それは毎日毎晩思ひながら、考へながら、部屋へ歸るんだが、一日中立つてゐるので疲れて夢も見ずに寢てしまふ。

淋しいなあ。ほんとにつまらないなあ……。佳込は辛い。その內適ひにするやうに部屋を探さうと思ふが、何分出る事も出來ない。夜、寢てしまふのがをしくて、暑い部屋の中でじつと目を開けてゐると、滯の處だらう、チロチロ……虫が鳴いてゐる。

冷い涙が不甲斐なく流れて、泣くまいと思つてもせぐりあげる涙をどうする事も出來ない。何とかしなくてはと思ひながら、古い蚊帳の中に、樽太の女や、金澤の女達三人枕を並べてゐるのが、何だか店に洒らされた茄子のやうで侘しい。

「虫が鳴いてるよう……。」

⑤

墮落論

坂口安吾

半年のうちに世相は變つた。醜の御楯といでたつ我は。大君のへにこそ死なめかへりみはせじ。若櫻は花と散つたが、同じ彼等が生き殘つて醜屋となる。もともとせの命ねがはじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて。けなげな心情で勇を揮つた女達も半年の月日のうちに夫君の位牌にぬかづくことも事務的になるばかりであらうしやがて新たな面影を胸に宿すのも遠い日のことではない。人間が變つたのでもない。人間は元來さういふものでもあり、變つたのは世相の上皮だけのことだ。

昔、四十七士の勘命を排して處刑を斷行した理由の一つは、彼等が生きながらへて生き恥をさらし折角の名を汚す者が現れてはいけないといふ老婆心であつたさうな。現代の法律にこんな人情は存在しない。けれども人の心情には多分にこの傾向が殘つてをり、美しいものを美しいまゝで終らせたいといふことは一般的な心情の一つのやうだ。十數年前だかに童貞處女のまゝ愛の一生を終らせようと大藏のどこかで心中した學生と娘があつたが世人の同情は大きかつたし、私自身も、數年前に私と懇ろであつた彼の一人が二十一の年に自殺したとき、美しいうちに死んでくれて良かつたやうな氣がした。一見滑稽な娘であつたが、壞れさうな危なさがあり眞劍さに地獄へ墮ちる不安を感じさせるところがあつて、その一生を正視するに堪へないやうな氣がしてゐたからであつた。

この數年中、文士は未亡人の戀愛を書くことを禁じられてゐた。戰爭未亡人を挑發墮落させてはいけないといふ軍人政治家の魂膽で彼女達に使徒の鉛生を強ひようと欲してゐたのであらう。軍人達の惡德に對する理解方は徹底的であつて、彼等は女心の廻り易さを知らなかつたわけではなく、知りすぎてゐたので、かういふ禁止項目を案出に及んだまでゝあつた。

いつたいが日本の武人は古來婦女子の心情を知らないと言はれてゐるが、之は皮相の見解で、彼等の案出した武士道といふ武骨千萬

⑥

砧をうつ女

李恢成

張述伊が没したのは、日本の長い戰爭がもう十ヵ月もすると終りを告げる冬のある日のことだつた。

その日のことを、僕は鮮明に憶えている。もう九ツになつていたからであろう。少年期におふくろと死に別れたことが、僕の性格形成に影響をあたえなかつたとは思わないが、その時分はまだほとんど無邪氣な少年に過ぎなかつた。

母はよく僕のことを「ジョジ■」と呼んで、ひやかしたものである。このあだ名はいまだに正確な語意がわからない。朝鮮語に變音別にしてお すと、「孟子」か「孟孟」、あるいは「玉孔」「孔玉」「孔孔」「玉玉」などが、辭典にその語源とおぼしいものはないのだつた。母は慶尚道の出である。新羅時代の古都・慶州にほど近い農村で生れている。その地方特有の子供にたいする愛称かと思つて同じ道內の人に訊ねたこともあつたが、ついにわからず仕舞であつた。

だが、强わないのだ。どうせ、その意味は、「おませ」「出來損い」といつた部類のものなのだ。そうと類推しながらあえて人々に訊ねたのは人が惡いようだが、しかし、人々につい訊ねてみたいほど、僕はこの呼び名にふかい愛着を覺えていたのだつた。

母がいつから、どんなわけで僕をそう呼ぶようになつたのか、そもそものことはわからない。だが恐らく、俏皮りのせいであろう。少年の僕は人を笑わせるのが得意で、しばしば大人達からも拍手喝采を博したものである。あの蜻蛉りは思い出してみると、「阿波踊り」よりはタイ國の王宮舞に似ている。手首をピクリピクリ動かし首もすくめたりして見たり。そのリズミカルな調子が芸の冴えを見せるのは嬉んだりはねたりする時だつた。人々はその姿からその昔、新羅の花郎（貴族階級の青年者）がめざましく舞った劍の舞を思い出して、うっとりしながら「その調子だ」とおもわず声

9/14

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

3　次の文章は、アメリカの歴史学者、ジョン・W・ダワーの『昭和　戦争と平和の日本』（明田川融監訳　二〇一〇年刊）の「まえがき」の一部である。これを読んで考えたことを、あなたの研究対象にできるだけ即しながら、自由にまとめなさい。（20点）

日本人には、イデオロギー上の理由から、他の民族とちがった年代の数え方がある。日本人は時代を天皇の治世と結びつけるのだ。したがって、このまえがきが書かれている一九九三年は日本式の数え方によれば平成五年で、これは平成の天皇である明仁天皇の時代の五年目ということになる。明仁天皇が即位した一九八九年より前は、彼の父親である裕仁天皇の時代で、日本の呼び方によると昭和時代である。それにしたがえば、一九二六年は昭和元年だったということになる。満州事変が起き、日本が中国北部の三省を占領し、ここに傀儡国家を樹立した一九三一年は昭和六年である。中国との総力戦は昭和十二（一九三七）年にはじまった。そして真珠湾攻撃は昭和十六（一九四一）年である。裕仁天皇は、昭和二十年八月十五日、かん高い声をパチパチと雑音の入った放送電波に乗せて、みずから日本の降伏を臣民に知らせた。そして、その後も四四年にわたって威厳のある君主として君臨しつづけた。裕仁天皇が一九八九年一月七日に亡くなるまで、この画期となる年は昭和六十四年として識別された。

このように天皇の在位と結びつけた暦というものは日本の伝統的な年代法というわけではなく、むしろ象徴をもちいた政治につきもののすぐれて近代的な方法である。成り上がりの武士たちが旧体制の支配を倒した一八六八年まで、たしかに日本には「年号」による年代の数え方があったが、たいていは天皇による支配とはほとんど関係のないものだった。支配者はたんに占いなどの儀式をとおして漢字二文字からなる縁起のいい名前（たとえば「天平」）を選び、その年を元年とし、飢饉、旱魃、インフレ、腐敗の蔓延、農民反乱、あるいはそれに匹敵するような不快な事件が起きると、あらためて年号を選定したことを宣明し、さらなる幸運を願って一から出なおした。このすべてにおいて天皇は端役にすぎなかった。じっさい、ほとんどの日本人は天皇の存在に気づかないか、少なくとも無関心であった。

これも、一八六八年以降、「近代化勢力」と「西洋化勢力」が権力を掌握したのを境に変わった。というのも、ほどなく日本の新しい指導者たちが、この新興国家を思想的にまとめるために、西洋における神やキリスト教に相当する存在が必要だという結論に達したからだ。指導者たちは、そのような存在を、長く無視されてきた天皇家と皇祖皇統にかかわる古代神話のなかに見出したのである。この、古い信条にしがみつくよりは、伝統を再発明する抜け目なさは、なぜ日本人が近代になって時代を現在のように数えるにいたったかを物語っている。昭和天皇は、日本語では「元号」として知られる「年号」とその在位が完全に重なりあう三人目の君主にすぎなかった。そして一九七九年、日本の保守政権は元号の継続的な使用を義務づける法律を成立させ、天皇中心の年代法を恒久化しようと図った。

昭和という漢字二字の文字どおりの意味は「煌めき」と「調和」であり、そのはじめの二〇年が抑圧、攻撃、残虐行為、苦難と暗黒の対立に満ちていた時代の呼称としてはおよそ似つかわしくない。それでも、興味ぶかい偶然だが、歴史家にとって二十世紀なかばの時代を表現するには、この「昭和時代」という天皇中心の時代区分のほうが従来の西洋方式より意味がある。私たち西洋人は、何か自明の理由から一九四五年という大きな分岐点で二十世紀を区分し、「戦前」と「戦後」というふうに時代をとらえる傾向がある。これは合理的な発想だが、誤解を招くおそれもある。日本だけではなく世界の他の地域にもみられた、戦前、戦中、戦後の経験のあいだにあるダイナミックな連続性をあいまいにしがちだからである。その意味では、昭和という包括的な概念――それは、日本でもっとも由緒正しい家柄に生まれた一人の男性の若き日の即位式から、長期におよぶ健康と幸運とに運よく結びついている――のほうが示唆に富んでいる。「昭和」は二十世紀なかばの重大な数十年を結びつけると同時に、過去と現在、「戦前」と「戦後」、戦争と平和がいかに密接に絡み合っているかを、われわれに思い起こさせてくれるのである。

10/14

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学 コース　※解答は別紙（縦書）

日本語学

次の一～三のうちからいずれか一問を選び、問いに答えよ。

一、あとの資料について、以下の問いに答えよ。

1. 上段の先頭から上段末行の「玉薬」の前までの箇所を翻字せよ。振り仮名も原文通りとし、漢字は対応すると考えられる字体とすること。濁音と考えられるところで濁点のない箇所には濁点を補い、適当に句点を加えること。
2. この資料の書名を記し、江戸時代の日本語研究資料としての位置づけについて、知るところを述べよ。
3. 語彙、語法等について、ここにあげた部分から知りうることについて、具体的に指摘せよ。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦　書）

二、つぎは大慈院本『涅槃講式』の一節である。これについて次の設問に答えよ。

設問一　左の全文を例にならって書き下し文にせよ。

（例）それ法性は動静は物に任せたり。

設問二　和語（とくに名詞と動詞）に施された節博士から知られる音調について、左の全文から分かること

左の全文から分かることを述べよ。

設問三　漢語に施された声点から知られる音調について、左の全文から分かること

を述べよ。

設問四　大慈院本『涅槃講式』について、その日本語アクセント史の資料としての

価値を述べよ。

12/14

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語学日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横書）

三、資料①は小林好日（一九二八）『国語国文法要義』（京文社）の一部である。資料②は寺村秀夫（一九九〇）『外国人学習者の日本語誤用用例集』（私家版）の一部である。これを読んで次の問題に答えよ。

問一　資料①で述べる「類推」について、近年の認知言語学でいうスキーマ（schema）という概念と比較しながらどういうことか述べよ。

問二　資料①で述べられている「あかいのおべべ」という例と資料②の形容詞の誤用を比較し、表現としての共通性、そう表現された原因を文法的観点から述べよ。

問三　言語の歴史的変化について、資料①の観点からどう見るか、日本語の例を出しながら簡潔に述べよ。

問四　文法研究における誤用分析の重要性について具体例を出しながら簡潔に述べよ。

13/14

資料①

言語の表現形態を研究する上に考へなければならぬことは類推作用（analogy）である。近世言語学者の心理的研究は類推作用の研究と密接な關係を有つてゐたもので、この研究が文語研究の進歩を促したことは莫大なものがあつたのである。それ故に余はこゝでこの説明をして置くことが便利であると思ふ。

そもそも類推作用の基礎は心理學のいはゆる聯想作用の上に在る。

われわれの心の中には覚えた言葉が類似によつて聯想を形作つてゐる。「後生一生」とか「短氣は損氣」だとか、語呂をあはせた慣用句や諺のやうなものゝ概念をあらが出來てゐるのはそのためである。われわれは種々なる事物のはず種々なる品詞、又その品詞の上に種々なる意味の變化をあらその品詞の或部分に變化をあらはす文法的形式、さては種々なる語の連結、種々なる句を子供の時からだんだん心の中に蓄積して相當の年齢に達すると、どの位の多數記憶してゐるか分らない。しかしそれらは雜然として何らの秩序なく心の中に蓄へられてゐるのではない。われわれがその再現する時は、之に類似を有する他の者が數珠の如く引出される。が言葉を覚えれば覚えるほどそれらは何らかの類似によつて種々の聯想を形作り種々なる聯想群を形作る。われわれの精神は意識的に無意識的にこの聯想群を形作るべき傾向を有つてゐるのである。

こゝに言葉に規則が出來る。われわれが文法を學ぶといふのは、この言葉に規則のあるといふことに本づくのである。（中略）

この原理は常に活動して止まない。言語の歴史上いつの時代にも繼續してゐる。事實われわれは之なくしては談話をかはすことが出來ない。それがために時としてこの類推の原理を用ひる結果、普通に誤つた類推と稱せられる形式に作り出すことがある。これを或人は類推違ひ（False Analogy）といふ名で呼んでゐる。

このいはゆる類推ちがひは日常子供の言葉や教育のないものゝ言葉の中に夥しく見出し得る現象である。未來の形は四段活用の動詞には「う」その他の動詞には「よう」をつけるのだが、ある子供の言葉の中に「たべる」にも「たばう」といつてゐるのをきいたことがある。これは四段活用に類推した誤である。同じ子供が「あかいのおべべ」（あかい着物）つべたいのおみおつ（つめたいのみもの）といふやうな言ひ方をしてゐた。これはすべての形容詞を普通の名詞と同

取扱に注意を要するのである。

教育のないものにも之と同じ類推ちがひがある。必ずしも無教育の者のみの間ではなく、相當に教育のある者の間にもきくものに「無理からぬ」といふ言葉づかひがある。これは「無理でない」といふべきを「廣からぬ」「遠からぬ」「正しからぬ」等いはゆる準形容詞に類推されたことから起つた類推ちがひである。

資料②

中国 12 自由作文 21	でも私はきびしい の(1) ほうが 無責任者(2) よりいいだろうと考えています。	1体修 *ノ連 2複N
中国 14 自由作文 21	あまり遠くない の(1) 将来、人々の知識水準が高くなるによって、それら(3) の人 に(4) いやがれる(5) ことがだんだん無くなる(6) と信じます。	1*ノ連 2ー名詞節 3コソア 4格 *ニ /ーガ 5活用 6複V ーテイク

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

和漢比較文学

左の文を読み、次の問いに答えよ。

（１）この資料の全文を、資料に施されている訓点にしたがって、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（漢字は通行の字体を用いること）。

（２）ここに記されている内容を現代語訳せよ。

（３）傍線部①、②の人物の姓名を答えよ。

（４）この資料が有する文学史上の意義について、考えるところを述べよ。

①為清慎公報呉越王書　加沙金送文　②後江相公

將袞再荏一札開封捧讀感佩駭懷兼

語重疊不異面展幸甚〻〻袞等違懐

之間聊加慰問邊城程遠恐有疎略令史

闕已早歸帆初飛秋氣涼伏惟大王動用

兼勝郎此其粗遣又所恵土宜有憚容納

既恐文於境外何留物於掌中然而遠

志難拒忘而依領別贈答信至亟收納

生涯阻海雲濤幾重南翔北嚮難付寒温

於秋鴻東出西流只寄瞻望於暁月柳去

四月中職昇左相府今見封題在未轉前

左右之間頗勿遅疑勒袞等還不宣謹言

天暦元年閏七月廿七日　日本國左大臣藤原朝臣

實頼　二字本元

呉越王殿下謹空

謹空二字一本注書之

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

ここから記入すること

〔日本語日本文学〕

＊選択分野に○を記入すること。

- 上代
- 中古散文
- 中古・中世韻文
- 中世散文
- 近世
- 近代
- 日本語学
- 和漢比較文学

総点

（裏へ続く）

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

（次頁へ続く）

——ボールペンで書くこと——

——これより先の余白には線枠に記入しないこと——

総　点

日本語日本文学(近代)解答用紙(その一)

1

日本語日本文学(近代)解答用紙(その二)

2　（①）　作者（　　）　作品（　　）

2　（②）　作者（　　）　作品（　　）

2　（③）　作者（　　）　作品（　　）

総点

2 (④) 作者( ) 作品( )

2 (⑤) 作者( ) 作品( )

2 (⑥) 作者( ) 作品( )

点
数

総　点